研究方法

下記の通り実施し、学年団やブロック、学習指導部で授業者を支えることで、日常的に授業研究に取り組む機会を設け、授業力の向上を目指す。また、自ら学び続け、共に高め合うことができる風土づくりを行う。

【実施計画】

〇全校研修（特活１、国語科２：「書くこと」の領域）

＊国語科の２本は、国語科授業づくり講座を兼ねる。教材研究会・授業研究会は、東部教育事務所

指導主事を招聘し、指導・助言をいただく。

＊ブロック研修は、国語科または特活で、全校研で行わない方の教科で行う。

＊学年研修（国語科・特活どちらでもよい。年次研・Ｆ会はこの限りではない。）

【内容】

〇学習指導要領の趣旨及び内容の理解を基に、資質・能力ベイスの単元づくりを行う。

→新しい学習指導案様式を活用する。

・ブロック研修･･･学習指導案

・学年研修･･････学習指導略案

〇評価の具体を示す。

〇見方・考え方を可視化する。

〇リレー授業や模擬授業等を行い協働的に取り組む。教材分析や授業省察を基にした研究協議などを行う。

１）国語科単元構想の基本

ア．指導事項の確認

年間指導計画（マトリックス）指導事項を確認し、児童の実態を振り返り、身に付けたい資質・能力を設定する。

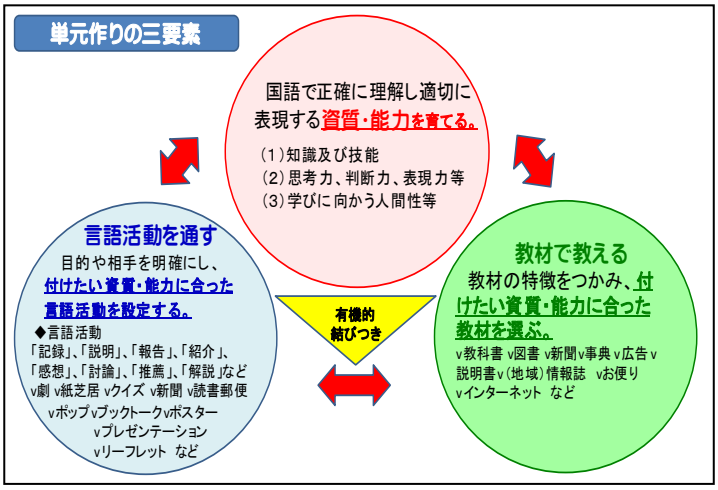
イ．最適な言語活動の設定

言語活動そのものが学習の目的にならないようにし、設定した資質・能力の育成に最適なものを設定する。その際、実際に教師が行ったり、モデルを作成したりすることで、言語活動を明確にする。

ウ．テーマや教材の設定

児童の興味関心を捉え、教材の特徴をつかみ、設定した指導事項や言語活動と結び付けて教材を選ぶ。また、図書館資料を活用する単元においては、併せて選定する。

＊（図２）のように、の三つの要素が有機的に結び付くように単元づくり



を行う。　　（図２）単元づくりの三要素

エ．単元の目標と評価規準の設定

指導目標に準拠し、言語活動を踏まえて評価規準を設定する。単元のゴールや本時においてどの

ような姿が実現できればよいかを考え、具体化する。特に「主体的に学習に向かう態度」について

は、従来の「関心・意欲・態度」からの転換を図る。

＊「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」参照

オ．学習過程の構想

言語活動と学習過程を密接に結び付け、学びの連続性、関連性をもたせ、単元全体が課題解決の

過程となるように工夫する。学習活動の一つ一つが、子供にとって目的や必要性を自覚できるもの

となっているか確認しながら、学習活動を構想していく。

カ．言葉による見方・考え方の可視化

児童が何に着目し（見方）、何を思考・判断・表現するのか（考え方）を明確にし、可視化する。

２）学習指導案

今回の学習導要領の改訂においては、三つの柱の資質・能力ベイスでの学びの転換が求められている。資質・能力ベイスで単元を描くためには、単元で育成する資質・能力と、どのような視点で物

事を捉え、どのように考え方で思考していくのかと見方・考え方を明らかにしていく必要がある。

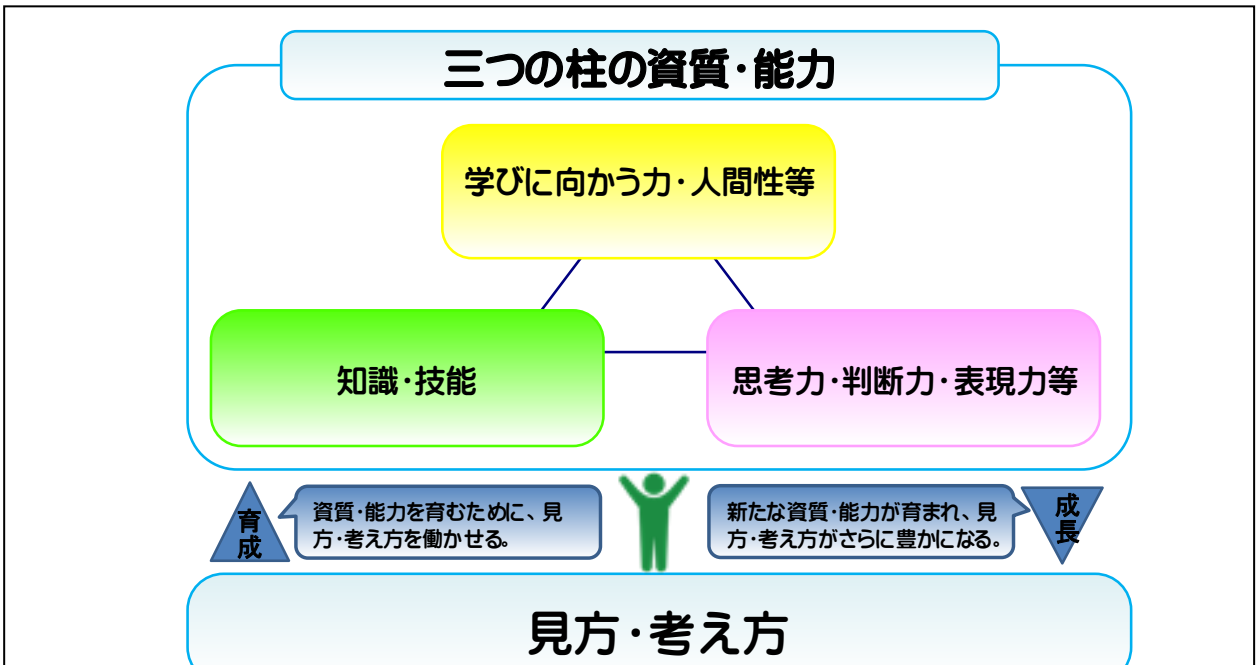
見方・考え方を学びの過程の中で働かせることで、資質・能力が伸ばされたり、育まれたりすること

で、見方・考え方もさらに豊かになるという互恵的関係にある。（図３）

以上のような授業を構想する際に大切なことを見える化できるよう、昨年度開発した国語科学習指導案を活用することとする。（資料１）

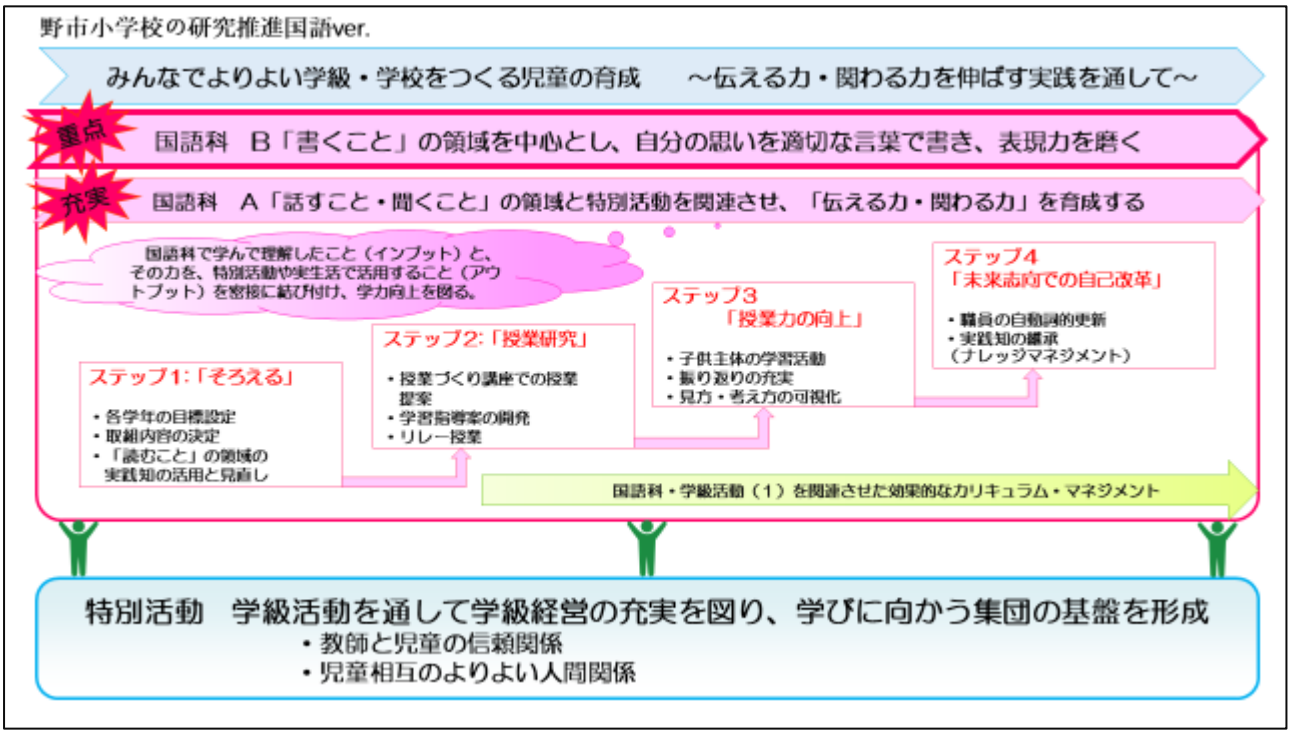
〔参考資料〕

・齋藤一哉・高知県教育委員会（編著）「新教育課程を活かす能力ベイスの授業づくり」ぎょうせい 2019 年 3 月 31 日



（図３）三つの柱の資質・能力と見方・考え方の関係

国語科・学級活動（１）を中心としたカリキュラム・マネジメントの推進

昨年度改訂した単元配列表において、国語科で学んで理解したこと、その力（インプット）を、特別活動や総合的な学習の時間、実生活で活用すること（アウトプット）を結び付けた。本年度は、さらに充実させ、学力向上につなげていく。

加えて、本校児童の課題である「書く力」を付けるために、「書くこと」の領域を研究の中心に据え、授業改善を進めていく。書くことは、手間や時間がかかることであるが、そうすることで出来事を振り返り、自分の思いを確かなものにしていくことができる。自分の言いたいことを適切な言葉を探しながら書くことで表現力を磨き、伝える力も向上していくと考える。